

曹洞俳壇

選・村松五灰子

大斐伊の水こんこんと大植田

島根県 藤江 堯

評 八岐大蛇退治の須佐之男命、櫛名田比売の舞台とされ、

また踏鞴製鉄の発祥の地ともいわれる斐伊川。

遙かな古代伝説より連綿と今に続く流れの恵に作者の心は
壮大である。

遠蛙父のさびしさ今にして

愛媛県 井上 征郎

評 学んで覚えることは多い。しかし若き心は父の心の底ま
では読めない。年齢が教えてくれるとはこのようなこと。父
に大きく近づいた一句。

◆大富士を負ふて茶摘女籠満たす 新潟県 星野 三興

◆白内障二泊三日の明易し 岩手県 関合 新一

◆矢草草なにか哀しき物語 埼玉県 松枝 勝一

◆居る人がゐない端居となりにけり 大阪府 柏原 才子

◆菖蒲湯に知る健康の有難さ 新潟県 大橋 恒次

◆すれ違ふ白がまばゆし夏帽子 北海道 川上 初子

◆夏来たり少年神楽の薄化粧 山梨県 望月 長業

◆年寄りほほどよし更衣 岐阜県 西尾美恵子

◆草刈女野仏に声掛けてゐる 岐阜県 金子 嘉幸

◆姉が呼ぶ螢は遠き昭和の夜 静岡県 富岡 一郎

*選者吟

手にボール有るかに投げて草の花

五灰子

*作句小見

「季節が動く」とよく言います。その俳句に別の季節を置
いてもそれなりに作品になるような句は結局良くない句。

この季節ではなくては成り立たない句を作りたいのですが。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

峡の空に雲つきつきに生るるごと短歌の湧
き来る日々はうれしき 長野県 毛涯 潤

評 晴々とした気持がストリートに伝わり、本当にそうです
ねと作者に声をかけたくなる。しかしそのような日々は稀で
歌作に悩む日が多ければこそ、偶にある「湧き来る日々」へ
の喜びが深いのだろう。上句がそんな感じをいだかせる。

古時計あまた掛かれる喫茶店入江のごとく
静まりてをり 東京都 長谷川 瞳

評 喫茶店の客は、各々自分の世界に浸って読書したり物思
いに耽ったりしている。初句二句は、客それぞれの時間を暗
示しているかのようだ。四句目への飛躍も詩的である。

◆戸障子をはづし涼しき自炊宿彼は誰時には蛍とびかふ
秋田県 小田 篤恭葉

◆桜樹の下に止めたる車より降り来し姿永遠に見られず
茨城県 出雲 則子

◆おい行くべい妻の遺影に声をかけ何処に行くにも連れ行
かんとす 福島県 西木 甚

◆デイサービス今日もあの人乗っているあまり楽しくなさ
そな顔して 奈良県 鈴木 重雄

◆二足組みの夏物ソックス選びつつひとりは独り小さき奢
り 兵庫県 前田あつ子

◆復員の父は二人の子供等が懐かぬ苦勞をいつも語りき
広島県 小畑 宣之

◆あじさいの小みちを朝の日浴びてゆく足のもつれて坂み
ちとなる 三重県 小阪 晋

◆田園の交響楽の始まりて草刈る音はフォルテッシモに
滋賀県 三田 和子

◆茄子胡瓜植えて雨待つ西の空弥彦の蜂は雲を抱えて
新潟県 星野 三興

◆原発の害は如何にと教授らは山女鳥追い山へ川へと
宮城県 須藤智恵子

*選者詠

水槽のレンズにふつとふくらみて金魚はあ
かきつぶてのごとし ちづ

*作歌小見

毛涯さんの「生るるごと」、長谷川さんの「入江のごとく」
は喩えとすぐ分かるので、隠れた比喩の隠喩に對して直喩と
呼ばれます。喩えは付き過ぎていても突飛すぎても効果的
ではなく、お二人は上手に生かして詠われています。



大本山永平寺



ご供養

九月は秋のお彼岸がございます。「ご先祖を敬い、亡くなった人々をしのぶ偲ぶ」という趣旨で国民の休日である秋分の日を中日として、前後三日を合わせた七日間が秋彼岸の期間です。皆さまも、お寺やお墓へと、ご先祖供養のおまいりに行かれることでしょうか。ここ永平寺では、「曹洞宗被差別戒名物故者追善供養法会」がそうどうしゅうひさべつかいなまものこしやついでんくようほうえございます。この法要は、過去に被差別部落の方々々に差別戒名を授けたという事実に対し、仏教者としてのあるまじき行為を深く反省し、二度と過ちを繰り返さないことを誓う法要であり、毎年禅師さまが御導師をつとめられ、心よりご供養申し上げるのです。そして九月二十九日は、道元禅師さまの祥月命日にあたり、二十三日から二十九日のご命日まで、報恩のご供養「御征忌」が修行されます。

道元禅師さまはご供養について「供養はかならず誠心じしんに修設しゆせつすべし」(供養はかならず誠心誠意をもって修行として営みなさい)とお示しです。修行とは、仏さまの教えにひたすら随順する行い입니다。つまり、道元禅師さまがお示しくださるご供養とは、仏さまの教えに従い、別け隔てなく損得勘定や報謝を求めるところないままに、ただ真心をもって他の安穩しんあん、幸福しあわせを願い営む、菩薩さまの行いなのです。

ご本山だより



大本山總持寺



「がさんぜんじ峨山禪師だいおんきしやうほうようさま大遠忌正当法要」を一カ月後に控えて

例年なら九月の声を聞くと暑さも凌ぎやすくなり、何となく落ち着いてきますが、今年の總持寺はいささか違います。

それは、いよいよ十月二十日の峨山禪師六五〇回大遠忌正法要が近づいてきて、何かと気ぜわしくなっているからです。

六月に「準法要」を修行した後も、總持寺へは連日全国から多くの参拝団体が訪れて来られ、それぞれ峨山禪師と深い御縁を結ばれております。

さて、九月はお彼岸の月。總持寺では二十日から二十六日にかけて毎日秋季彼岸施食会が行われます。

施食会は午後二時から始まり、お中日の二十三日秋分の日には江川紫雲しうんたい禪師さまが親しく大導師をおつとめになられます。

この日は大勢の檀信徒が参詣に訪れて大祖堂がいっぱいになり、お焼香の列が続いて香煙が途絶えることはありません。

また、この施食会期間中は法要の前には午後一時から参詣者へ「法話」が行われ、担当の役寮のほか總持寺の修行僧たちによるミニ法話も行われます。

彼岸が終わった翌日の二十七日は今年の「仲秋の名月」、いわゆる「十五夜」です。峨山禪師の「両箇りやうこの月」を偲びつつ名月を愛で、大遠忌の大円成を念じたいものです。